

田辺明生・竹沢泰子・成田龍一編

環太平洋地域の移動と人種——統治から管理へ、遭遇から連帯へ

京都大学学術出版会、2020年、422頁、3,600円＋税

現代社会において、人種化・人種差別の対象のひとつとされているのは移民・難民である。様々なマイノリティに対して「人権の尊重」や「多文化主義」を掲げて擁護する議論があると同時に、マイノリティに同化をせまり、同化されない者に対しては「距離」をとり、排斥の対象にしようとする。現代社会では「…従来の国民秩序・人種秩序を超えた人権意識や多文化主義の高まりと、ポピュリスティックな多数派主義による人種化・人種差別の先鋭化が同時に起こっている」と本書の編者は述べる。

人種は環大西洋でまず問題化され、それが環太平洋に波及したと思われがちだがそうではなく、実は「人種にかかわる環大西洋と環太平洋の問題構成は成り立ちを異にしつつ入れ子になり重なりあい、現時の人種をめぐる議論が目の前に展開されている」ことを本書は指摘する。そして環太平洋地域に存在した集団間の序列は、血統・職業・生活様式などの多元的で「目に見えない」差異の複雑な絡まり合いによって構成されたことにふれる。見えない差異でも、身体、能力、気質が「違う」「劣っている」とする言説と経済や法における制度が絡み合って「人種化」され、単なる偏見にとどまらない「制度的差別」につながっているというのである。さらに、グローバル化が進む現代社会には、種々の違いにもとづいた差異化・差別化が秩序維持の名目で蔓延^{はびこ}り、それが自らの不安を他者のせいにしてしようとする情動の政治と結びついて、あらたな人種化が生まれているという状況がある。そしてこの状況を見通して、「どのようにあらたな人種化に抗っていくことができるのか」を模索することが本書の目的のひとつなのである。さらに、グローバル化が人々の違いを際立てて排除を促したことは事実だが、一方でグローバル化は新たな出会いを可能にもする。その点に注目すれば、アート、演劇、文学、学術の営みから新たな想像力が生まれ、グローバル時代の新しい、そして豊かな社会文化のあり方を見出せるのではないかという希望につながるというのだ。

こうした視座にたった本書は、環太平洋地域の様々な場所における「人種化」に注目した読み応えのある10の論考において、斬新な議論を繰り広げる。例えば、開拓時代のアイヌの近代化経験。アメリカ日系社会内部における被差別部落民への差別の二重構造。1920年代アメリカの日本人とメキシコ人の移民間の関係。1992年LA蜂起での黒人、韓国系、ラティーノへの新たな視点。「日本文学」と「日本語文学」の担い手に注目して新たな人種主義をみる。近現代インドの「人種」を論じるなど。このような論考を通じて、分断のみえる現代社会を生きる読者は、潜在的な連帯の可能性を探求する道を見出すための学びを深めることができる。本書の編者が述べる、「自己と異なる他者との出会いは、現在の価値秩序へのとらわれから解放されるための扉」だという言葉に真摯に耳を傾けたい。

……………高木(北山)真理子(愛知学院大学)